わたしの聖戦（ジハード）

女性が働くということ ―― 199

医学ジャーナリスト・医学博士　植田美津恵

ベビーカーマークが突き付けるもの

電車内で、見慣れぬマークに気づいた。どうやら、ベビーカーで移動する人に心配りを促すメッセージを含んでいるようだ。

調べてみると、2015年に国交省によって作成されたもので、このマークのステッカーがあればベビーカーをたたまずに電車やバスに乗ることができるという意味らしい。逆に、エスカレーターなどベビーカーをたたまなければ危険だと思われる移動手段の場合は、ベビーカー禁止のステッカーが貼られている。

そんなに以前からあったはずのベビーカーマーク。恥ずかしながら私自身が知らなかったが、あるアンケートではこのマークを「知らない」と答えた人が6割あったというから、普及には少し時間がかかるのだろう。

電車やバス内のベビーカーについては、様々な論争がある。車内での迷惑行為として、携帯電話の通話の次に多いのがこのベビーカーだ。今のベビーカーは色々な機能がある分、結構かさばって邪魔だと感じる人が多い。特に車内が満員の時には、2、3人分のスペースを取るベビーカーにまゆをひそめる人は少なくない。

「抱っこ紐を使えばいい」「そもそも混雑した車内に子ども連れは迷惑」「せめてベビーカーはたたむべき」などなど辛辣な意見がある。一方、「抱っこ紐は子どもが嫌がって大変」「好きで混んだ電車に乗っているわけではない」「片手で荷物を持ち子どもを抱きつつベビーカーをたたむのは至難の技」という反論がある。

そのような社会の声を反映しつつできたのが、ベビーカーマークだ。残念ながら、その存在だけでなく、ベビーカーで移動せざるを得ないママたちの気持ちを思いやる風土はいまだ育ってはいないのが現状。もともとその種の思いやり文化が熟成していれば、何もこんなマークを作らなくても済んだはずだ。誰もが感じていることだが、海外に行けば、多くの国ではベビーカーに寛容で、階段などでもベビーカーを運ぶ手助けをする姿をよく見かける。ベビーカーだけでなく車いすもまた同様。おもてなしの国を標榜しているはずの日本なのに、現実はホスピタリティに欠ける場面が目立つ。

車内のステッカーといえば、優先席にもある。高齢者や妊婦などに席を譲るよう促しているその意味を知らぬ人はいないだろうが、あまり功を奏していないのは誰もが知る通り。

妊娠していることを周囲に理解してもらうために作られたのはマタニティマークだ。こちらは、厚労省作成によるもので、妊婦にやさしい環境づくりを目指し、バッジとして身に着けてもらうようにできている。しかし、妊娠していることへの嫉妬や無理解から、かえって心無い言葉を浴びせられるなどの意見が寄せられ、バッジ自体を小さくしてしまった。バッジを常に付けていた、と答えた妊婦は3割に満たない、との結果もある。

結局、その人の立場にならなければ当事者の大変さを想像できないこころの貧しさを突き付けられているようで、ステッカーやバッジが増えるたびに気持ちが落ち込んでいく。

また、作る方も作ったことに満足してしまい、その後の追跡フォローがやや不足している感も否めない。もし、自分が妊婦だったら。小さな子どもを連れだったら。思うように体が動かなかったら…。

今、日本に欠けているものは、想像力とこころの余裕なのかもしれない。

イラスト・伊藤栄章